

誠意ある聞き込み調査がソフト対策の充実につながる

瀬尾 克美*

地球温暖化の影響か、平成10年、11年と引き続いて集中豪雨が続き、多くの人命と財産が失われることとなった。

一般に自然災害後には、行政機関は災害復旧に向けて全力投球である。まずは関係機関に災害報告をするため、人、家屋、道路、田畑等の被災状況が調査され、復旧工法が検討される。行政関係者だけでは手が足りないので、民間のコンサルタント等を総動員し、じっくりと被災者の話を聞く余裕はない。

災害調査は、目的によって大きく4つの種類に分類できそうである。1つは、自然現象そのものの機構解明の調査。2つは、災害復旧等の工法の検討をするハード対策調査。3つには、被災地の立地環境の調査。4つには、災害当日の住民の行動から警戒・避難等の対策を検討するソフト対策調査である。前二者については今まで研究者、行政関係者が熱心に力を入れてきているところであるが、後二者は比較的十分な対応がなされてきてなかった分野ではなかろうか。

平成10年の新潟県佐渡ヶ島、福島県南部、高知県中南部の土砂災害において、当財団の土砂災害ソフト対策研究会で、最近特に施策の充実が望まれているソフト対策の課題の指摘、施策の提案を期して重点的に調査を実施することとした。災害は自然現象と人間の生活・行動のかかわりによって生じるものである。まず、災害において人間サイドに重点を移すこと、すなわち地元の人々の体験をできるだけ共有しようと考えたのである。そこで、地元の人々がどんな現象を経験し、どんな行動をし、何を考え、何に困り、何を望んでいるのかをできるだけ詳しく調査することにした。被災地の地元の人々の痛みを知ることが特にソフト対策の原点であるとの思いであった。

* (財)砂防・地すべり技術センター専務理事

このためまず、被災地で直接災害に関係されたと思われる人家を訪れ、聞き込み調査をすることとした。まずは、聞き込みを行うことにより、雨の降り始めから被災するまでの状況を時をおって、四次元で生々しく復元することができる。新潟県佐渡ヶ島の災害においては、次のようなことが具体的に把握することができた。雨が降り出してから山腹の湧水が増え、普段は水が流れていない山ひだに水が流れ出し、家の前の側溝が溢れてくる。街の中央を流れている河川の水位が上がり氾濫しそうになる。そのうち、裏山が崩れてくる。続いて、河川が氾濫し床下、床上と水位が上がり、同時に多量の土砂も流出し堆積する。こういった現象とその時刻を聞き込みによりしっかりと確認し、近傍の雨量計と値をつきあわせれば、その地区はどの程度の雨量でどのような現象が生じるのかといったことを生々しく再現することができる。それを分かりやすく整理することでその地区において次回警戒・避難体制をとるために貴重な目安になるのである。

集落ごとにそこに存在する側溝・河川の断面、上流での砂防施設の整備状況が異なるので、雨量とそれによって生じる現象の整理は集落ごとに行う必要がある。この雨量と生じる現象の関係、さらに危険箇所（人家および避難ルートに対して）の分布と危険度、降雨の時に生じる湧水の場所、各家屋における居住人口、高齢者および傷病者の在否等を分かりやすく資料整備することにより、地元の人々も自主的に判断できる体制をつくるのが容易になる。こういった体制をEveryone Watching System（地域連携防災体制）と称し、今後各集落で緊急に整備すべきであると思っている。現在、地元の協力者が多い新潟県両津市東立島地区でモデルを作っているところである。こうした特にソフト対策の課題の指摘および施策の提案をするために基本となり、かつ有効な調査方法

は聞き込み調査である。平成10年の土砂災害で初めて試み、平成11年の広島災害においても下記の調査表のように改良して実施しているところである。この聞き込み調査は主に被災者の方を主な対象とする点で調査に当たっては災害、行政、人生経験を必要とする調査手法である。今までの調査体験を通していかなる心構えで調査を実施すべきかを次に記してみる。

(1) 当時の被災状況をよく把握していそうな家をまず選ぶ。

調査対象は数よりも質である。

(2) 調査対象に選んだ家には迷うことなく呼び鈴を押す。

(3) 丁寧な礼をし、調査目的を明確に分かりやすく説明する。

(4) まず災害において、いろいろご苦労されたことに対し慰労の言葉をかける。

(5) 日中に在宅されている方は、お年寄りが多い。時間をゆっくりとり、こちらの調査表にしたがって順に機械的に尋ねるだけでなく、相手が話したいことにもしっかりと聞く耳をもつ必要がある。近所の人、嫁、息子への不満等の言に対しても忍耐強く対応する必要がある。よい人生勉強にもなる。被災者の方は行政担当者等関係者にいろいろと話を聞いてもらいたいと思っている。

(6) 災害現場で出会う人には、まず必ず声をかける。被災者の方あるいは親戚の方、また町内会

長、市町村議員等であったりして貴重な話が聞ける。数少ないチャンスを確実にものにすることが必要である。

(7) 調査者は誠意と感謝をもって地元の方に対応すべきであり、まずその態度が第一である。また、簡単なプレゼントが用意できるとさらに効果的である。当財団ではこのためテレホンカードと日本手拭い(各々オリジナル)を用意した。

(8) 行政についての質問には客観的なきまりのみ答え、実施されたことについて私見、判断は差し控える。言われたことについては行政担当者に伝えておくと返答するにとどめる。

以上聞き込み調査には調査する人の人間性、防災経験が問われるものである。調査成果は、調査者の人格と経験に左右される。

災害は人間がかかわることで生じる。特に充実したソフト対策の実施については、災害時における人間の心理、行動をよく理解する必要がある。この分野に多少でも近づくために聞き込み調査を実施してきたつもりである。ここに聞き取り調査と言わないで聞き込み調査としたのは、被災者の心に入り込んで調査するという意図を明らかにしたかったからである。まだまだシステムとして不十分な調査であるが、関係者のご指導、ご意見を得て、防災対策の強力な手法となるべくさらに努力することを誓うものです。

土砂災害における聞き込み調査表

場所 呉市吉浦東町 調査年月日時 平成11年7月13日 調査者 瀬尾 鬼石 飯塚
 氏名 中村 文子 男 (♀) 年齢 60代 家族構成 息子夫妻、孫2人
 居住年月 2年前に住居新築。30年前から新築までは沢氏宅の所に居住。 家屋の場所 下図参照
 (防災機器) 防災無線(屋外拡声、個別受信) (有線放送電話) 有線テレビ(CATV)
 ・拡声装置は、平成3年台風19号以降バッテリーで利用できるようになった。

【前兆事象と時刻】 事象の後に括弧書で時刻を記入

(気象状況) 注意報、警報、雨の降り方、雷、風等

・14~15時に雨が降っていた。17時頃は雨があがっていた。

(周辺事象) 湧水、山腹からの流水、側溝の水量、河川の水量、水の濁り、山の木のゆれ、周辺の音等

・楠さん宅裏は、普段は水が流れていないのに、14~15時には泥水ではないが多量の水が流れていた。16時10分頃楠夫人(今回の災害で死亡)とお互いの家の裏の出水状況を確認しあっていた。その時中村さん宅の裏では小石混じりの流れであった。このようなことは30年来無かったことである。16時30分には息子の職場に対応について電話をしている。

【土砂移動の発生と時刻】

(発生時刻)

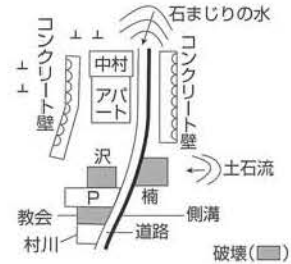
・6月29日17時3分に大きな音がした。時間はアパート2階の人が、携帯電話を使用して確認したと聞いている。

(発生事象) 音、家屋の破壊、土石、流木の大量な流れ等

・滑るような大きな音がした。楠さん宅が流出し無くなったのが見えた。その時は沢さん宅はアパートの陰になり確認できなかった。

(その時の気象およびライフライン状況)

降雨 17時には小止み 風 雷
 電気 通じていた 電話 切 水道 切 (水道管が破裂したため断水)
 ガス プロパンを使用



【被災状況】

(被災者と被災場所) 見取り図をつける

【避難状況】 () 内に時刻を記入

避難勧告の有 無 () 避難指示の有 無 () 自主避難 (○)

(連絡方法)

防災無線、有線放送電話、有線テレビ、ラジオ、一般テレビ、広報車、サイレン、近所の人からの連絡、その他山伝いに歩いて自治会長(岡本)宅に知らせにいった。帰ってみると嫁と二人の孫は警察の避難の呼びかけもあり、道路沿いに下りた。この時流水とそれに混じる小石で足に無数の傷をおった。本人は山伝いに下に降り嫁に会ったが、戸締まりをしてないことに気づきました家に帰り戸締まりをしてきた。

(行動)

そのまま家に居た、(避難した) (日 時 分)、避難場所

避難期間

・6月29日は、勝法寺に行き1泊した。その後文化センターへ移動し2泊した。

【危機意識】

今後の大雨の時にはどう行動しますか。

ここが危険箇所と知っていましたか。

・知っていた。2年前に急傾斜地危険区域に指定されている。

つぎの事を知っていますか、あるいは参加したことはありますか。

ハザードマップ、避難場所、避難ルート、防災訓練、防災講習会等

今までに災害を被ったことはありますか。また災害についてどんなことを聞いていますか。

・昭和42年の呉災害は、特に記憶に残っていない。

【防災体制についての意見】

(市町村に対して)

- ・自宅裏の沢を調査して欲しい。
- ・流木が詰まり流水が溢れたことより側溝に蓋が欲しい。

(その他)

呉市議(兼吉浦東町自治会長)の岡本節三氏より、以下の話を伺った。

- ・呉市議では、7月2日に協議会を開催した。
- ・7月10日には、吉浦地区の住民を中心としたボランティアが約400名参加し、被災地の片付けを行った。2t車で500台分の土砂・瓦礫を搬出した。
- ・支所単位の気象情報を流してほしい。
- ・沢夫人(今回の災害で死亡)は中村さんの実の妹